

共同住宅建設に伴う

宮ノ下遺跡第 11 次発掘調査報告書

例 言

1. 本書は財団法人東大阪市文化財協会が実施した共同住宅建設に伴う宮ノ下遺跡第11次発掘調査の報告書である。
2. 本調査はユニバース土地開発株式会社(代表取締役・志井廣明氏)から依頼を受け、東大阪市長堂1丁目74-1他11筆で、1999年11月1日～2000年1月17日まで現地調査を実施した。
3. 現地調査および整理作業にかかる費用はユニバース土地開発株式会社が全額を負担した。
4. 本事業にかかる現地調査および本文の執筆は財団法人東大阪市文化財協会・別所秀高がこれを担当した。
5. 本書に掲載した水準高は東京湾中等潮位(T.P.)を、座標系は旧測地系の平面直角座標第VI系を基準にした。
6. 本書に収録できなかった現場写真や遺物写真、遺物データベース等を附録のCDに収めた。是非活用されたい。
7. 現地調査にあたってはユニバース土地開発株式会社および株式会社森本組の関係者各位の御理解と御協力を賜った。当協会職員をはじめ、趙 哲済・小倉徹也両氏(財団法人大阪市文化財協会)、井上智博氏(財団法人大阪府文化財センター)、岡田清一氏(財団法人八尾市文化財調査研究会)からは現地で有益な御教示を得た。心より感謝いたします。また、現地調査および整理作業には以下の補助員が参加した(五十音順)。

木下恭彦 柴田由花子 杉本隆二 峰松麗子 山岡茂樹

目 次

第1章 はじめに一調査経過と調査方法一	1
第2章 宮ノ下遺跡の既調査成果と周辺諸遺跡	2
第3章 層 序	5
第4章 遺 構	11
第5章 遺 物	19
第6章 まとめ	34
報告書抄録	35

第1章 はじめに—調査経過と調査方法—

宮ノ下遺跡は大阪府東大阪市長堂および足代新町の近鉄布施駅北側で楕円状に広がっていると考えられている(東大阪市教育委員会1996)。今回、ユニバース土地開発株式会社によって東大阪市長堂1丁目74-1他11筆(図1.1)で共同住宅建設工事が計画されたため、東大阪市教育委員会が試掘調査を実施したところ多数の弥生土器が見つかった。これを受け両者の協議のもとで、開発地内の600㎡を対象に財団法人東大阪市文化財協会が調査を実施することになった。

調査は東大阪市教育委員会の試掘調査で本体工事によって遺物包含層に影響がないと判断された地表下約2.3mを担当者立会のもとで重機によって掘削した(図1.2)。その後、調査範囲の外周沿いに連続土留め壁を、範囲内には本体建物の基礎杭を設置し、さらに調査範囲の西北部を覆鋼板で覆った。これらの工事を施した後に地表下約2.3～2.75m(標高0.3～-0.15m)を対象に人力掘削によって調査を実施した。なお、重機による掘削および後の人力掘削で出た残土はすべて場外搬出とした。これらの措置は、敷地内に作業スペースが確保できないことや調査中の安全に配慮したこと、調査による本体工事の遅延を最小限に留めるためのものである。

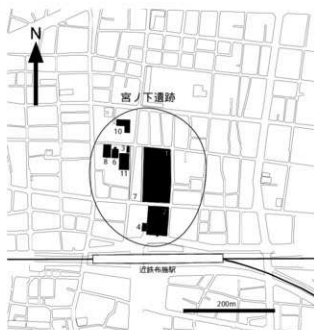


図1.1 宮ノ下遺跡の既調査地点。数字は調査次数を示す。



図1.2 機械掘削の様子



図1.3 調査地北側隣接ビルの屋上より調査地と布施駅のほうを臨む

第2章 宮ノ下遺跡の既調査成果と周辺諸遺跡

宮ノ下遺跡は1992年2月に、「ヴェルノール布施」の建設工事に先立って行われた試掘調査で発見された遺跡で、2002年8月までに財団法人東大阪市文化財協会によって計9回の本調査が実施されている(図1.1)。ヴェルノール布施建設予定地内で行われた第1次調査では、浅い埋没谷の中に形成された縄文時代晩期-弥生時代の貝塚が(別所1996a)南側に隣接する「布施駅北口地下駐車場」建設工事に先行して行われた第2次調査では、埋没谷の続きや周辺の水を埋没谷へ排水するための溝などが見つかった(別所1996b)。第3次調査でも同様の溝と弥生時代中期の遺物を確認した(別所1999a)。第3次調査までは、より上位の層準で中世の遺物が散見されていたものの調査の対象にはならなかったが、第4次調査で古代・中世の遺物を含む堆積層がはじめて確認され、以降の調査ではこれらも対象に含まれるようになった。また、貝塚が埋没していた浅い谷の続きがこの調査でも検出され、この谷は相対的な海水準の低下によって形成されたものであることが指摘された。これらの調査では、河内平野中央部における縄文時代-弥生時代の古環境変遷を明らかにするための様々なデータを得ることができた。

第6次調査では奈良-明治時代の水田跡や畑の耕作地跡、井路跡、鎌倉-室町時代の建物跡が検出され、堆積相の分布や土地条件図から調査地西方にかつての流路があり、自然堤防の上で集落が形成されていたことが推測されている(松田1997)。第6次調査地点より西側で行われた第7次調査では予想どおり、集落跡を想起させるような高密度で分布する平安-鎌倉時代のビットのほか、井戸、耕作地跡、井路跡が、東側隣接地の第8次調査(中西1998)でも同時期の井戸、耕作地跡、井路跡が検出されている(別所1999b)。また、第10次調査では鎌倉-室町時代の耕作地跡、江戸時代後期-明治時代初期のかんがい水路跡などが見つかる。これらのうち平安-鎌倉時代の集落跡や耕作地跡は、妙心寺文書の「後村上天皇論旨案(正平5年7月11日)」、「北畠親房寄進状(同年12月5日)」、「河内国司庁宣(同年12月9日)」、「師守記(延文元年3月10日)」、「後円融天皇論旨(康暦2年3月20日)」にみられる「足代庄」、「大乘院寺社雜事記(延徳3年9月16日・18日条)」にみられる「網代庄」(平凡社1986)の画に比定される。なお、もとは字北町にあったとされ(布施市史編纂委員会1962)、現在足代1丁目にある足代地蔵尊には「永禄十年戊壬十月廿四日 河内国淡川郡足代庄」の銘があり、荘園制度の崩壊期に元の領主にとって代った新興支配勢力に抵抗した在地農民の証であることがうかがわれる。

宮ノ下遺跡が位置する東大阪市西部域ではあまり遺跡が確認されておらず(図2.1)、調査事例も少ない。これは本地域が河内平野堆積盆の中央部に位置し、地下深くに遺跡が埋没しており、本来存在する遺跡を見つけにくかったためと思われる。しかしながら、1992年の宮ノ下遺跡の発見により、今後も東大阪市西部域で新たに遺跡が見つかる可能性があることが関係者に再認識された。とくに、旧大和川の分流が形成した自然堤防上には、古代以降の遺跡が埋没していることが予想される。

高井田遺跡は宮ノ下遺跡の北方1.5kmの自然堤防上に位置する。1963年に下水道管理設工事で発見されて以来、布施市教育委員会、河内考古学研究会、東大阪市文化財協会によって3回の調査がおこなわれ、弥生時代前期-中期初頭の遺物・ピット・溝・杭列、6世紀後半から7世紀初頭の須恵器・土師器などが見ついている（布施市教育委員会1963, 原田1984）。このうち、第1次調査で出土した弥生時代前期-中期初頭の土器に、朝鮮系無文土器が含まれることが指摘されている（田代1985）。

西堤遺跡は宮ノ下遺跡の北東方2kmの自然堤防上に位置する。1968年に下水道管理設工事で発見された。これまでの調査では、5世紀末から6世紀の須恵器・土師器、ウシ・ウマの骨、平安時代の土師器、公朝十二銭の一つである「承和昌寶」などが出土した（下村1977）。

小若江遺跡は宮ノ下遺跡の南東方3kmの自然堤防上に位置する。1940年に日本大学大阪専門学院（現近畿大学）構内で発見され、かつては「長瀬」遺跡と呼ばれていた。発見当時は調査がおこなわれなかったものの、工事中に地下3～7mで多数の遺物が採集された。採集された遺物には、弥生時代中期の土器、古墳時代前期の土師器、同後期の須恵器・土師器や蓋形埴輪・円筒埴輪がある（布施市史編纂委員会1962）。近年になって近畿大学や東大阪市文化財協会によっても調査が実施されており、奈良・平安時代および中世の遺物や遺構が確認されている。

弥刀遺跡は宮ノ下遺跡の南東方3.5kmの自然堤防上に位置する。1963年に市立弥刀小学校の校舎建築工事のさいに発見された（辻合ほか1964）。これまで

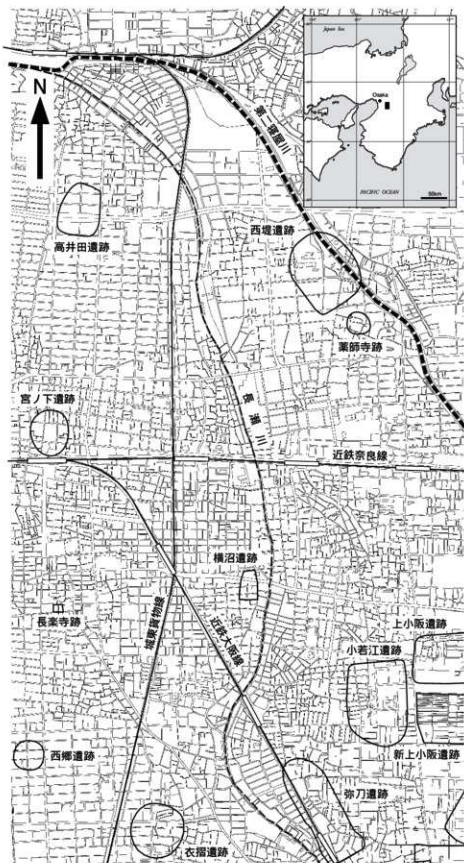


図 2.1 東大阪市西部域の遺跡

東大阪市教育委員会、東大阪市遺跡保護調査会、東大阪市文化財協会などによって8回の調査がおこなわれ、古墳時代前期の土師器・ビット・土壌・井戸、古墳時代後期の須恵器・土師器、平安時代～鎌倉時代の土師器・黒色土器・瓦器・建物跡・井戸・溝・土壌などが確認されている（下村1980・1992、芋本1989、原田1990、別所2002）。また、近鉄大阪線沿いにある近鉄弥刀変電所内では、かつて奈良時代の人面墨書土器がみつかっており、これは現在名古屋市立博物館が所蔵している。

文 献

- 芋本隆裕 1989 弥刀遺跡第5次発掘調査概報、「東大阪市文化財協会概報集-1988年度」, 東大阪市文化財協会。
- 下村晴文 1977 「村上学園校舎増築工事に伴う西堤遺跡調査概報」, 東大阪市教育委員会。
- 1980 弥刀遺跡発掘調査概報、「東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集-1980年度」, 東大阪市遺跡保護調査会。
- 1992 弥刀遺跡第7次発掘調査「東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要-平成3年度-」, 東大阪市教育委員会。
- 田代 弘 1985 畿内周辺部における「朝鮮系無文土器」の新例。森浩一編「同志社大学考古学シリーズII考古学と移動・移住」, 225-233。
- 辻合喜代太郎・荻田昭次・浅田松次郎・桑原正明 1964 友井出土の須恵器と木片。「河内文化」11, 38-43。
- 中西宏宏 1998 「宮ノ下遺跡第8次発掘調査報告書」, 東大阪市文化財協会。
- 原田 修 1984 「高井田遺跡第2・3次調査報告」, 東大阪市文化財協会。
- 1990 弥刀遺跡第4次調査報告。「山賀遺跡発掘調査報告書-付弥刀・瓜生堂・縄手・若江遺跡発掘調査概要-」, 東大阪市教育委員会。
- 東大阪市教育委員会 1997 「東大阪市内埋蔵文化財包蔵地・指定文化財分布図」
- 別所秀高 1996a 層序及び遺跡形成過程「宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書」第2分冊, 東大阪市文化財協会, 7-26。
- 1996b 「布施駅北口駐車場整備及び寝屋川流域調節池建設工事に伴う宮ノ下遺跡第2次発掘調査報告書」, 東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会。
- 1999a 「ビル建設に伴う宮ノ下遺跡第3次発掘調査報告書」, 東大阪市文化財協会。
- 1999b 「ビル建設工事に伴う宮ノ下遺跡第10次発掘調査報告書—東大阪市足代地域における足代分流路の形成と歴史時代の人間活動の変遷」, 東大阪市文化財協会。
- 2002 「老人ホーム建設に伴う弥刀遺跡第8次発掘調査概要報告書」, 東大阪市文化財協会。
- 布施市教育委員会 1963 「高井田遺跡調査報告」
- 布施市史編纂委員会編 1962 「布施市史」第1巻。
- 平凡社 1986 「日本歴史地名体系第28巻 大阪府の地名II」
- 松田順一郎 1997 「宮ノ下遺跡東部における歴史時代の層序-地下埋設管工事に伴う宮ノ下遺跡第7次発掘調査報告書-」, 東大阪市文化財協会。

第3章 層序

機会掘削時に観察した標高1.0～0.4m付近の堆積柱状図とより下位の断面図をそれぞれ図3.1、3.3に示す。調査地点の標高は2.5mであるが、地表下1.5～2.0mは既存建物の基礎によって地層が破壊されていた。

層序が観察できた最上部は標高1.0m付近で、層厚約15cmの泥混じり粗粒砂からなる畑作土層がみられた。13世紀後半～14世紀前半の瓦器椀や土師器、6～8世紀頃の須恵器の破片、弥生土器などが出土したが、最も新しい時期の土器から判断して、13世紀後半～14世紀前半の畑作土層と考えられる。同時期の畑作土は隣接する第7次調査地点でも確認されている(松田1997)。この土層は下位の砂層と泥が卓越するI～V層を混合して作られたもので、調査で検出したEP3や南壁断面でみられた土坑はこれらを地下から採取するために掘削された土砂取り穴である。

標高0.6～0.9mはトラフ型斜交層理をなす細粒化～極粗粒砂からなる。下位の1層の最上部から本層にかけて上方粗粒化サクセションを示し、洪水氾濫の示相堆積構造(伊勢屋1982, 増田・伊勢屋1985)の一種と考えられる。卓越する古流向は南西方向で、洪水氾濫によって調査地の西側を流れていた足代分流路(別所1999)から運搬されてきたと推測される。出土遺物はまったくない。

1層は下位より無層理で灰色の粘土質シルト(地層番号6,7,以下「地層番号」を省略)無層理で有機物を含む濃い灰色の粘土質シルト(5)。無層理で淡い灰色の粘土質シルト(4)の累重からなる(図3.4)。静穏な後背湿地の堆積環境が推測される。本層は標高0.4m以上に分布するが、比較的大規模に掘削されたDC4,5,6の直上付近ではやや高度を減じる。4と5の層界付近に

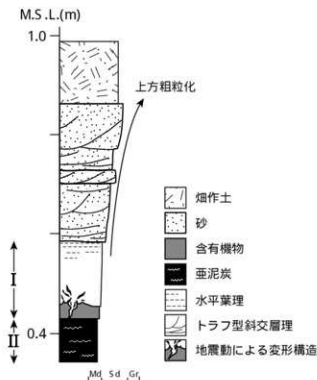


図3.1 標高1.0～0.4m付近の堆積柱状図

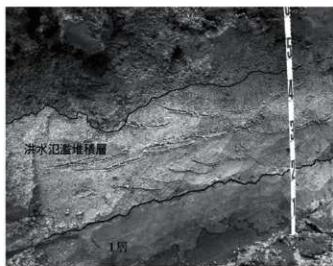


図3.2 標高0.6～0m付近の断面



図3.3 東壁断面・水系は標高0m。

南壁
M.S.L.(m)
0.5—
0—

西壁



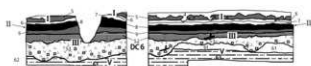
南壁
M.S.L.(m)
0.5—
0—

中央南北



東壁
M.S.L.(m)
0.5—
0—
-0.5—

東壁



北壁
M.S.L.(m)
0.5—
0—

北壁



南壁
M.S.L.(m)
0.5—
0—

中央東西



南壁
M.S.L.(m)
0.5—
0—

南壁



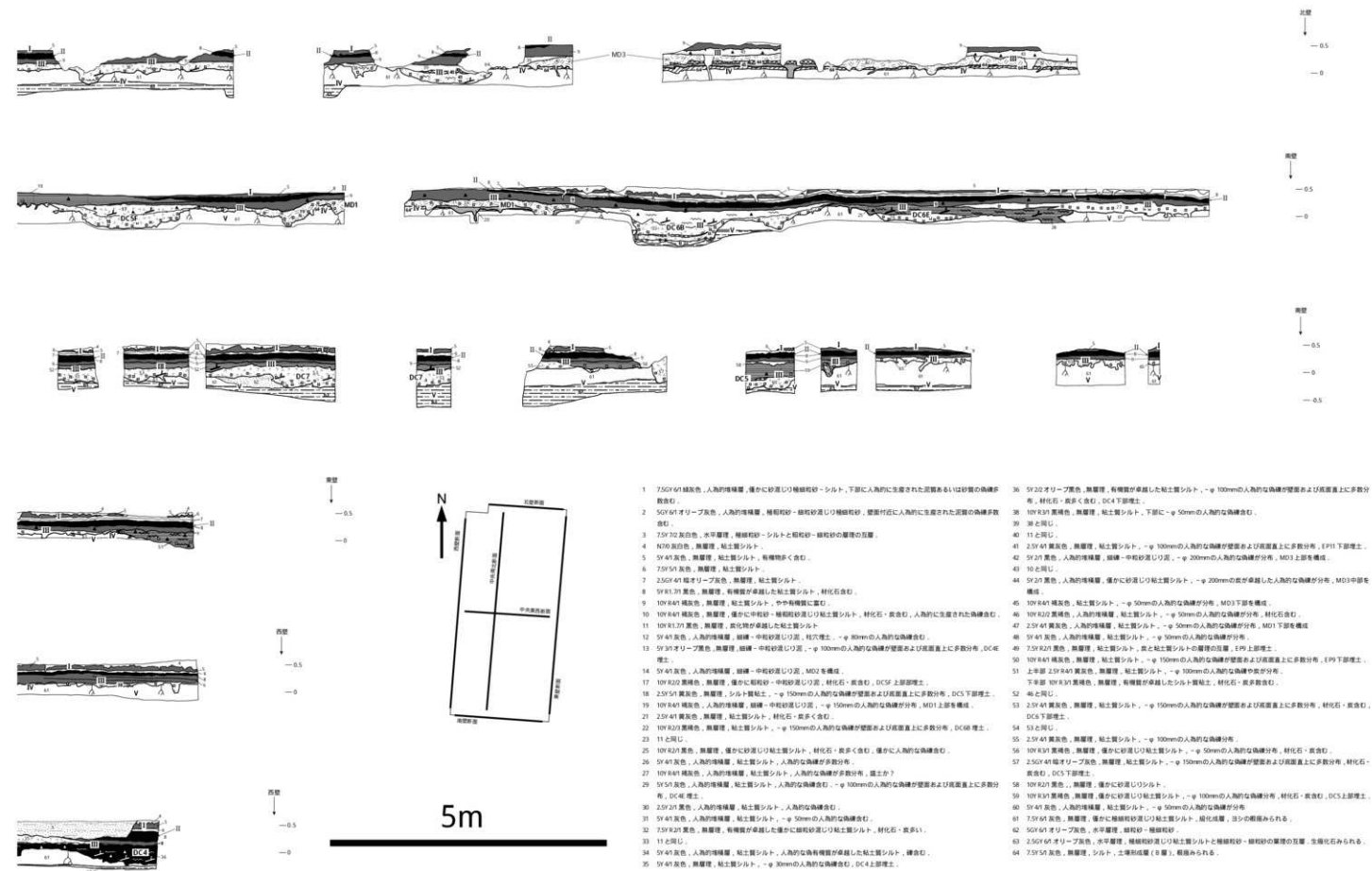


図 3.4 宮ノ下遺跡第11次調査地点露頭断面

は地震動による変形構造があり、垂直断面では火災構造が(図3.3)、水平断面では渦巻き状の模様(図3.6,7)が観察された。出土遺物はまったくなかったが、周辺の調査地点との対比から古墳時代中期～後期にかけて継続的に堆積したと考えられる。

II層は無層理で黒色の粘土質シルトからなる垂泥炭層。有機物が非常に卓越し、未分解の葉や根などの植物遺体がしばしばみられる(図3.3,5)。層厚約10cmで標高0.3m付近に分布する。水深が浅く、水の循環に乏しい後背湿地の堆積環境が推測される。弥生時代中期中葉(畿内第III様式期)の土器が出土したが、周辺の調査地点の同じ層準には畿内第IV様式期、第V様式期、古墳時代前期庄内期、同布留期の土器が含まれ、弥生時代中期中葉～古墳時代前期にかけて継続的に堆積したと考えられる。

III層はとくに溝や土坑などの規模が大きい遺構埋土の下半部(図3.9)、遺構掘削時に生じた残土からなる盛土(図3.8,10)、これらを覆う覆土(図3.9)に大別されるが、遺構埋土下半部と覆土とは必ずしも厳密に別れてきていない。分布上限高度は標高0.3m付近で、下限高度は遺構の深さに支配されている。主として遺構埋土下半部から弥生時代中期初頭(畿内第II様式期)の遺物が多数出土した。

遺構埋土の下半部は灰色～濃い灰色を呈する粘土質シルトのマトリクスからなり、遺構掘削時に生産された偽礫や材化石、炭を非常に多く含む。とくにDC4やEP9の埋土は有機物に富む。マトリクス部が人為的な攪拌を受けた痕跡や遺構が埋め戻された痕跡は認められず、



図3.8 中央南北断面 .MD1 付近、細かくちぎれた白い泥が水平方向に並ぶところが MD1 の盛土。

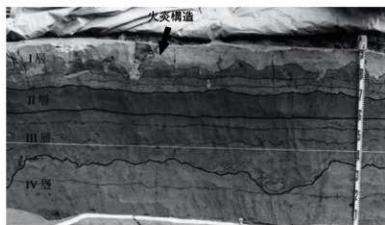


図3.5 東壁断面 地層最上部の薄い色の地層と濃い色の地層との境界が乱れ火災構造をなしている。

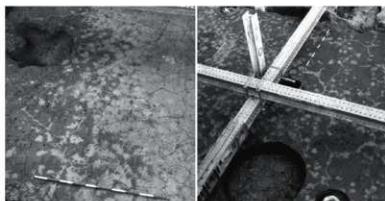


図3.6 I層中の水平断面、地震動によって泥質堆積物が渦を巻きながら変形した様子がわかる。

図3.7 II層上面の水平断面、上位のI層が亀甲状に分布している。

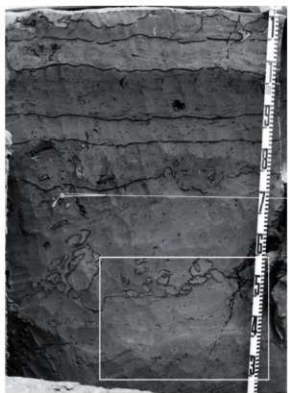


図3.9 西壁断面DC5付近、枠内拡大写真は図3.11。



図3.10 西壁断面6A区付近、MD3断面、比較的小さい人為的な偽礫が水平方向に分布し、人為的に積み重ねられている様子がわかる。盛土の母材はDC6を掘削した時の土砂と考えられる。



図3.11 西壁断面DC5下底～IV層付近の断面、DC5下底直上には人為的に生産された偽礫が分布する。IV層には粘土質シルトと極細粒砂～細粒砂の葉理の互層がみられる。



図3.12 西壁断面4C付近のIV層(63)中でみられた生痕化石。

遺構内で湧出した地下水のもとで浮遊物質が沈積し、遺構を充填したと考えられる。

遺構掘削時に生じた残土からなる盛土は粘土質シルトの偽礫が積み重なって構成されている。水平面で盛土の分布を確認できたのはMD1のみであるが、垂直断面からは2A～2B区にかけてのDC5とDC4の間に分布するMD2、5A～6A区のDC6の西側から北側へかけて分布するMD3を確認した。

これらを覆う覆土は無層理の粘土質シルトで、とくに盛土付近では盛土上面からリワークした炭や盛土が浸食されてできた偽礫を含む。静穏な後背湿地の堆積環境が推測され、調査地点で初めて遺構が形成された時に比べて地下水位が著しく上昇し、居住には適さなくなったことがうかがえる。

IV層は極細粒砂混じり粘土質シルトと極細粒砂～細粒砂の葉理の互層(63、図3.5.11)と級化成層をなす僅かに極細粒砂が混じる粘土質シルト(61)の累重からなり、最上部には土壌形成が認められる。63には生痕化石が(図3.12)、61にはヨシの根痕がみられる。この累重については下限高度が標高2m付近にまで達し、4600～3300y.B.P.の海進堆積物であることを推測している(別所1999)。

文 献

- 伊勢屋ふじこ 1982 茨城県、桜川における逆グレーディングをした洪水堆積物の成因。地理学評論, 55, 597-613。
- 別所秀高 1999 「ビル建設工事に伴う宮ノ下遺跡第10次発掘調査報告書—東大阪市足代地域における足代分流路の形成と歴史時代の人間活動の変遷」東大阪市文化財協会。
- 増田富士雄・伊勢屋ふじこ 1985 「逆グレーディング構造：」自然堤防帯における氾濫源洪水堆積物の示相堆積構造。堆積学研究報, 22・23, 108-116。
- 松田順一郎 1997 「宮ノ下遺跡東部における歴史時代の層序—地下埋設工事に伴う宮ノ下遺跡第7次発掘調査報告書—」, 東大阪市文化財協会。

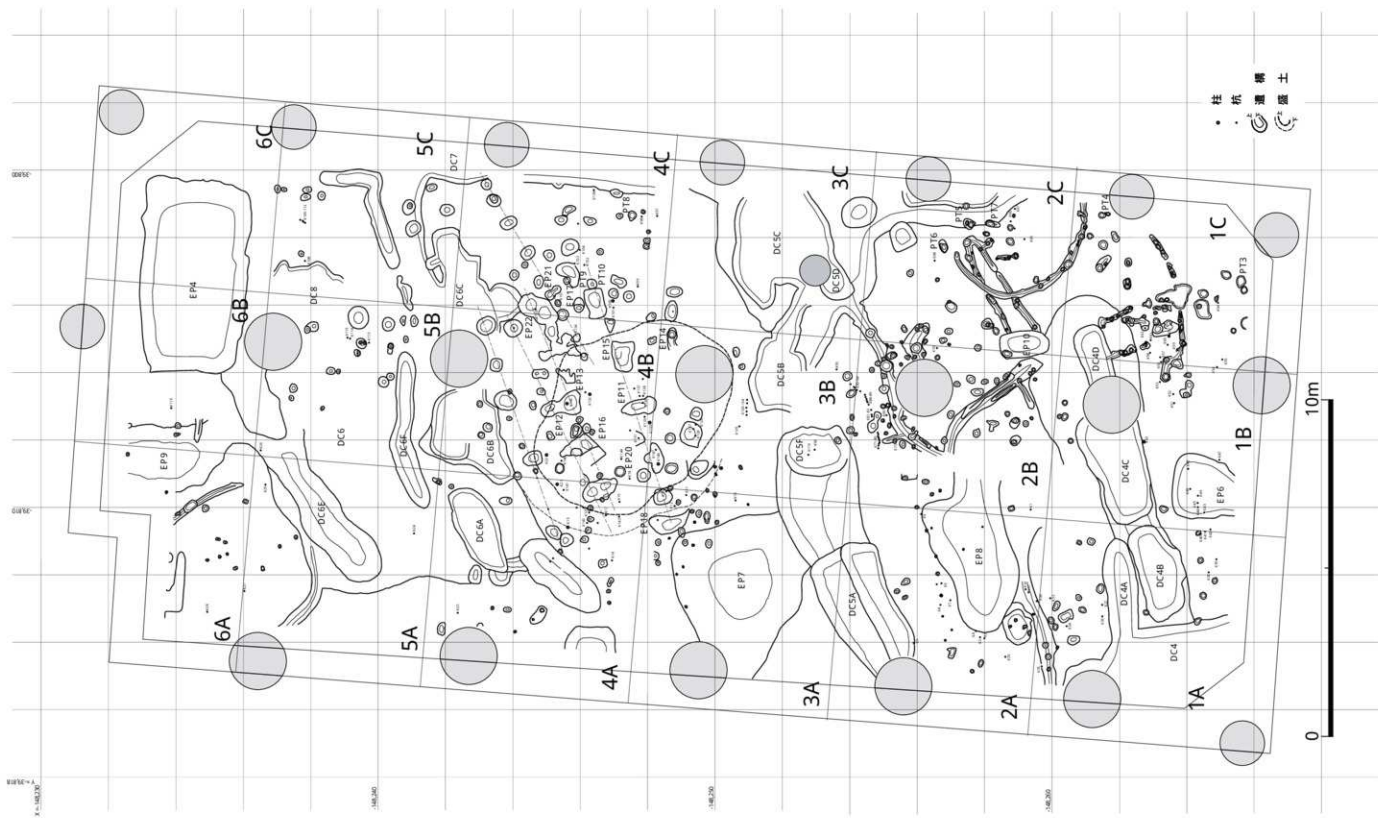


図4.5 弥生時代中期初頭の遺構、杭および柱分布図

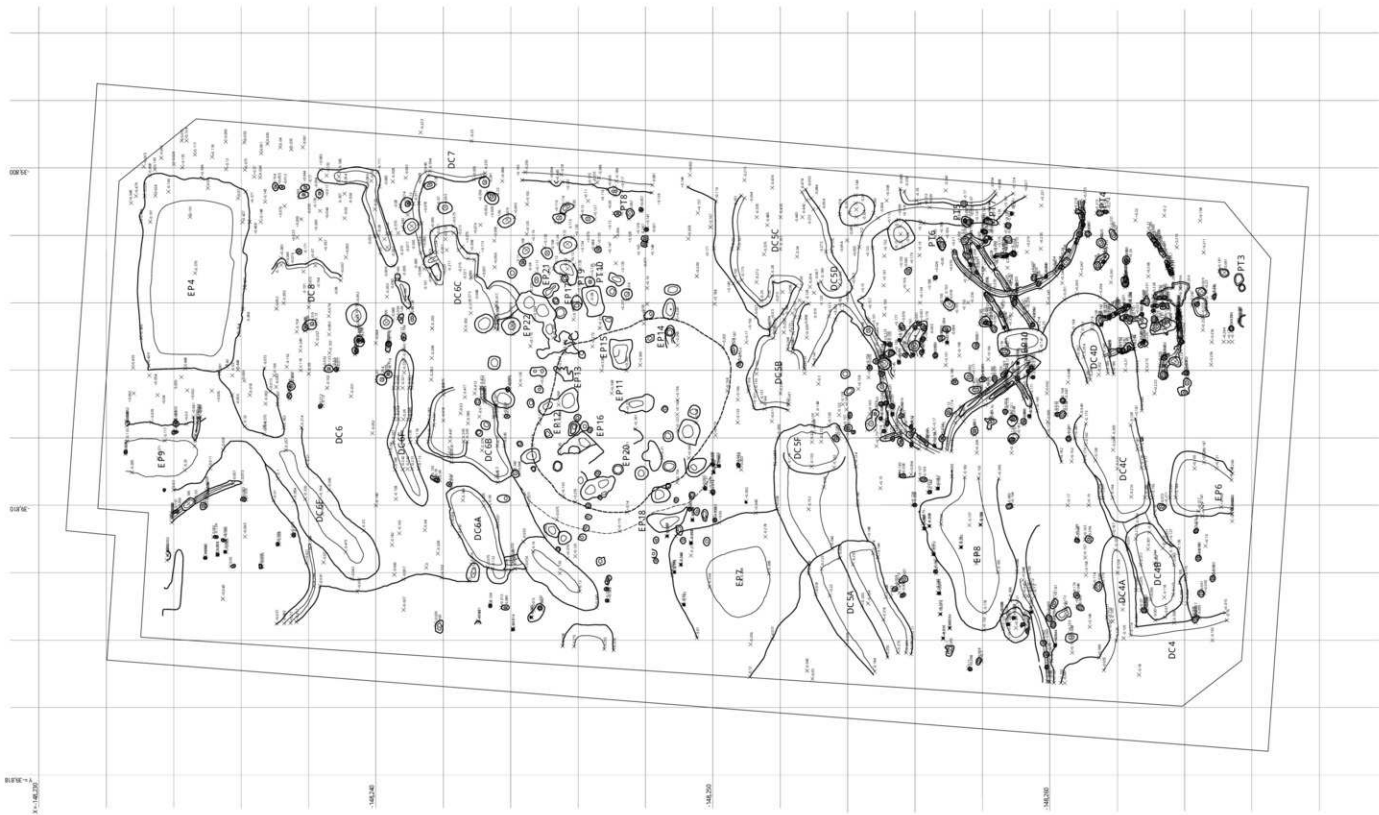


図4.6 弥生時代中期初頭の遺構面の標高

第4章 遺構

機械掘削深度の標高0.3m付近で古代以降の遺構を、より下位で弥生時代中期中葉、同初頭（畿内第II様式期）の遺構面を確認できた。後述するように弥生時代中期初頭の遺構群は当該時期の大規模な土地改変を挟んで前後2時期（弥生時代中期初頭第2面，同第1面）に細分される。

古代以降の遺構は調査の過程で偶然検出できたもので、遺構形成時の加工面や機能面、より後世の加工面ではなく、単なる調査作業上の検出面で認知できた遺構群である。古代以降の遺構には溝や土坑、土砂取り穴がある（図4.1）。EP1,5は楕円形、EP2,3は長方形の平面形状をもつ、いずれも出土遺物がない。EP4は隅丸長方形の305cm×574cm、深さ90cm以上の平面プランで、機械掘削時に上層でみられた畑作土を作るために掘削された土砂取り穴と考えられる（図4.2）。出土遺物のうちもっとも新しい土器型式から判断して13世紀後半～14世紀前半に併行する。EP4埋土は埋め戻された土砂からなるが、泥質の土塊を丁寧に貼りつけた泥層が挟まることから畑から地下への漏水を防ぐためのものと思われる（図4.4）。調査地南東隅で検出したDC1の埋土も埋め戻された土砂が顕著でEP4同様、土砂取り穴と考えられる。DC1は幅50～60cm、深さ20cm以上の溝で、調査地を東西に横切る（図4.3）。

弥生時代中期中葉の遺構は調査地南端で検出したEP6のみである。調査時は下位の遺構面と同一面で検出したが、出土土器に時期差がみられ下位の遺構面とは



図4.1 古代以降の遺構の分布。北より撮影。

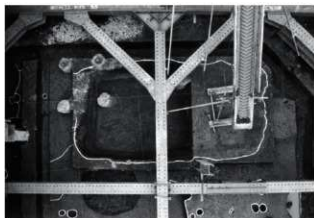


図4.2 EP4を半載したところ。真上より撮影。



図4.3 DC1完掘状況。東西方向にのびる北西より撮影。



図4.4 EP4埋土断面。漏水を防ぐために埋土の中間付近に粘土が貼られている。

分別した。弥生時代中期初頭～中葉（畿内第Ⅱ～Ⅲ様式）の土器が出土し、Ⅱ層下面検出遺構と考えられる。

弥生時代中期初頭の遺構群は高密度で分布し、それらを上下2面に分別できると考えられる（図4.5,6,7,8,9）。弥生時代中期初頭第1面はDC4,5,6やEP7,8,9など比較的大規模に掘削された溝や土坑、これらの掘削残土で作られた盛土、さらに盛土上面に分布する柱穴群からなる。DC4は長方形形状の土坑が溝状に連なり、幅1～3m、深さ最大約70cmを測る。DC5は長方形形状～不定形の土坑が溝状に連なり、幅2～3m、深さ最大約60cmを測る。DC4および5はいずれも東北東～西南西方向に主軸をもつ。DC6は幅10m、長さ14m以上の不定形の浅い土坑であるが、その中には溝や土坑、柱穴が多数みられる。DC4～6からは弥生時代中期初頭の土器に伴って多数の材や加工木が出土した（図4.10,11,12）。これらの遺構の掘削残土で作られたのがMD1～3である。このうち平面で分布範囲を確認できたのはMD1のみであるが、MD1の盛土は部分的に埋没過程で流失している（図4.13）。MD1上面には直線上に並ぶ土坑群ないしは柱穴群、柱穴内で根元が保存された柱がある（図4.14,15,16,17）。このうち柱K15,21,22は柱穴底よりも下方へ食い込んだ状態が確認でき（図4.17）。これらの柱に伴う建物が沈下していたことがうかがえる。いっぽう、EP21,22には柱穴底に木片が敷きつめられ（図4.18,19）、EP13のK145は柱の根元が根絡み構造になっており（図4.20）、建物の

図4.7 弥生時代中期初頭（畿内第Ⅱ様式期）の遺構群。調査区東半部全景。北より撮影。

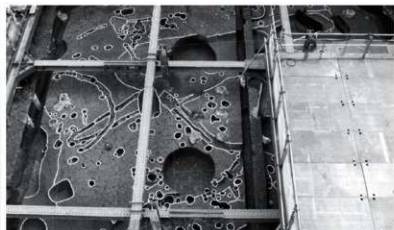
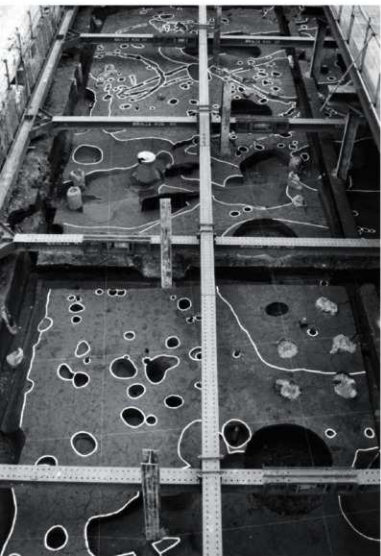


図4.8 弥生時代中期初頭（畿内第Ⅱ様式期）の遺構群。2B～1C区全景。北より撮影。

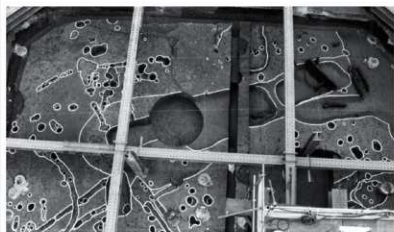


図4.9 弥生時代中期初頭（畿内第Ⅱ様式期）の遺構群。1A～1C区全景。北より撮影。

沈下を防ぐための工夫が施されていた。平面プランが不明確で確証に乏しいが、建物の沈下が認められ、またそれに対処するための工夫が施されていることから、柱には相当な荷重がかかっていたと考えられ、MD1上面の土坑群および柱穴群には高床建物の柱穴があると想像される。また、地層からはこの時期には地下水位が上昇傾向にあることが推測され、周辺の湿気を避けるために盛土を施し、さらにその上に高床建物を建てたことは首肯できる。

弥生時代中期初頭第2面に伴う遺構群は同1面形成時の大規模な掘削から免れた調査地南東部(図4.22)やMD1基盤層上面(図4.21)わずかにDC4~6壁面および底面で検出した。幅が狭く、浅い溝(図4.22)や柱穴、多数の杭および杭列(図4.23,245)がみられた。

弥生時代中期初頭第2面に確実に供伴する遺物の中で時期を特定できる土器はないが、第1面のDC4,5,6やEP7,8,9形成時に第2面に供伴する遺物を一緒に攪乱していることから、第1面を覆う堆積層中には第2面に供伴する遺物が混入していると考えられる。しかしながら、同堆積層中から出土する土器には大きな型式差がみられず弥生時代畿内第II様式の範疇に収まり、第1面と第2面には時期差はないと判断される。



図4.10 弥生時代中期初頭(畿内第II様式期)の遺構群、DC4Aとその周辺の柱穴群および杭群、DC4からは多数の材化石が出土した、1A区、北西より撮影。



図4.11 弥生時代中期初頭(畿内第II様式期)の遺構群、中央右の遺構はDC6A、中央奥はMD1の肩付近、直立状態の杭および柱が多数みられる、4A区、北西より撮影。



図4.12 DC4材化石および土器出土状況(1)



図4.13 MD1の検出状況、MD1上には柱が分布していた。



図 4.14 K15 と柱穴埋土断面



図 4.15 K21 と柱穴埋土断面



図 4.16 K22 と柱穴埋土断面

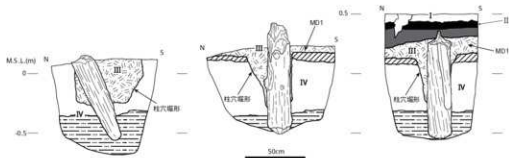


図4.17 K15(左),K21(中),K22(右)とそれぞれの柱穴埋土断面図 建物の荷重により、柱は柱穴下底を突き抜けて下方へ押し込まれている。



図 4.18 EP22 の底で検出された木片。柱の沈下を防ぐために柱穴の底に敷き詰められたものと考えられる。



図 4.19 EP21 で検出された木片。EP22 の例と同様、柱の沈下を防ぐためのもの。



図 4.21 MD1 下面で検出した遺構群、弥生時代中期初頭（畿内第 II 様式期）、MD1 上面では遺構の認定が困難であったが、同下面ではそれらを検出できた。所々に直立した柱がみられる。北より撮影。

図 4.22 弥生時代中期初頭（畿内第 II 様式期）の遺構群。2B～1C 区全景。北西より撮影。



図 4.20 EP13 で検出した根組み柱。建物の沈下を防ぐための工夫がみられる。柱は K145。



図 4.23 2B 区北西隅付近、小さな杭が一列に並んでいる様子がわかる。



図 4.24 小さな杭群(上図)の断ち割り。

第5章 遺物

土器

・古代以降の土器

機械掘削時に採集した土器や標高0.3m付近で検出した遺構から出土した土器があるが、いずれも破片が多く、時期を特定できたものは僅かである。

DC1で出土した202は須恵器の杯身で、口縁は外反しながら立ち上がり、底部には高台をもつ。陶邑II型式3段階（7世紀後半）に併行する。

DC3出土196は中世の瓦質三足釜、199は13世紀後半～14世紀前半の和泉型の瓦器椀である。197および198は陶器の破片で近世のものと考えられる。

EP4出土201は13世紀後半～14世紀前半の和泉型の瓦器椀、200は6世紀ごろの須恵器高杯の脚部である。

・II層およびEP6出土土器

II層出土土器には広口壺（006, 040, 050, 090, 141）、短頸壺（081）、無頸壺（063, 191）、高杯（031）がみられる。006, 090, 141は受け口状の段をもつもので、口縁はいずれも上に拡張する。006は口縁外面に稚拙な柵描簾状文がみられるが、090, 141のそれは摩耗が著しい。いずれも畿内第III様式に属する。040は口縁端面に波状文があり、頸部から胴部上半にはタテ方向のハケの後に柵描直線文が施されている。畿内第III様式に属する。050は無文の広口壺で、畿内第II～III様式に属する。081はゆるやかに外反する口縁をもち、口縁端面には柵描直線文、頸部には柵描直線文と柵描扇形文が組合わさった疑似流水文がみられる。畿内第II～III様式に属する。063は無文で口縁が内湾しながら立ち上がる。畿内第II～III様式に属すると考えられる。191は直立する口縁をもち、柵描直線文がみられる。畿内第II様式に属する。031は高杯の脚部で文様はみられない。畿内第II様式に属すると考えられる。

EP6出土土器には広口壺（165）、甕（002, 007, 164）、鉢もしくは高杯（167）がみられる。165の口縁はやや外反気味にロート状に拡がり、口縁端面は垂下し面をもつ。口縁端面、頸部には柵描直線文がみられる。164は「く」の字状に鋭く屈曲する口縁をもち、胴部外面にはハケが施されている。002は胴部～底部外面にタテ方向のハケが施されている。007は表面の風化が著しく調整が不明瞭。以上の甕はいずれも畿内第III様式に属する。167は口縁直下に沈線がみられ、ヨコ方向のヘラミガキが丁寧に施されている。畿内第II～III様式に属すると考えられる。

・III層および弥生時代中期初頭第1面の遺構群出土土器

III層出土土器には広口壺（083）、長頸壺（051）、壺（068, 037）、甕（001, 064, 080, 082）、鉢（099）、蓋（076）、手づくね（059）がみられる。083の口縁は外反しながらロート状に拡がり、端部には面をもつ。口縁端面はナデによって中央に窪みがみられ、頸部には柵描直線文が施されている。051

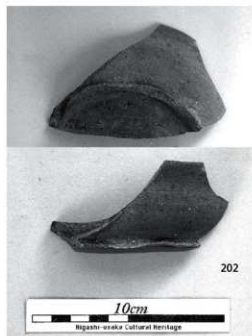


図5.1 DC1出土須恵器杯身

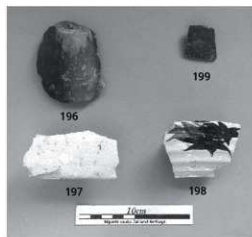


図5.2 DC3出土瓦器および陶器



図5.3 EP4出土瓦器および須恵器

表 5.1 出土土器一覧(1)

No	系統	器種(形式)	土器型式(時期)	地区	層準・遺構	器高(cm)	口径(cm)	備考
001	弥生土器	甕	室内築山埴式		山内(中央南北面谷い トレンチ)	21.7 *	21.5 *	炭付香
002	弥生土器	甕	室内築山埴式	1B	EP6	10.8 *		
003	弥生土器	甕	室内築山埴式	2B	DC5A(中央南北面谷い トレンチ)	23.9	18.4 *	器底外面に窪り付
006	弥生土器	灰口甕	室内築山埴式	2A	10層		24.8	有段口縁、溝積炭状文・刺突文
007	弥生土器	甕	室内築山埴式	1B	EP6		11.3 *	炭付香
013	弥生土器	甕	室内築山埴式	3C	DC5			口縁端部をH外面タテハケ、内 面コハク
014	弥生土器	甕	室内築山埴式	5B	DC6			紀伊系、器底コナナメクスズリ67と 同一個体炭付香
015	弥生土器	甕	室内築山埴式	3C	DC5	17.6 *		底面にハツ溝直線
018	弥生土器	灰口甕	室内築山埴式	5C	DC6		17.9 *	溝積炭状文、波状文
019	弥生土器	灰口甕	室内築山埴式	5C	DC6	15.1 *	30 *	シクモン石含む
021	弥生土器	甕	室内築山埴式	2A	EP8	19.1 *	23 *	
025	弥生土器	甕	室内築山埴式	1A	DC4C(M)	15.1 *	16.2 *	器底外面に窪り付
027	弥生土器	灰積甕	室内築山埴式	1B	DC4C(L)	11.6 *	18.1	溝積炭状文
028	弥生土器	甕	室内築山埴式	1A	DC4			炭付香
029	弥生土器	甕	室内築山埴式	1C	DC4D(M)			炭付香
031	弥生土器	高杯	室内築山埴式	1A	DC4			
032	弥生土器	甕	室内築山埴式	1B	DC4C(L)	15.1 *	21.8	紀伊系、炭付香
034	弥生土器	甕	室内築山埴式	1A	DC4C(M)		29.6 *	
036	弥生土器	灰積甕(小型)	室内築山埴式	1A	DC4C(M)	13.1 *		調整、反形器底
037	弥生土器	甕	室内築山埴式	2A	山内	11.2 *		底面にハツ溝直線
040	弥生土器	灰口甕	室内築山埴式	山内	山内			溝積炭状文
041	弥生土器	甕	室内築山埴式	1B	DC4C(L)		19.8 *	人形系、外面タテハケ、内面コハク
045	弥生土器	甕	室内築山埴式	5A	DC6		24.4 *	炭付香
050	弥生土器	灰口甕	室内築山埴式	3A	山内		18.5 *	
051	弥生土器	灰積甕	室内築山埴式	3A	山内	20.9 *		溝積炭状文
059	弥生土器	手づくね	-	3A	山内	5.4 *		
060	弥生土器	甕	室内築山埴式	4B	MD1			溝積炭状文
061	弥生土器	甕(大型)	室内築山埴式	4B	山内			溝積炭状文、縦線文
063	弥生土器	灰積甕	室内築山埴式	4B	山内		13.8 *	2孔一対の穿孔
064	弥生土器	甕	室内築山埴式	5A	山内		15.1 *	
066	弥生土器	甕	室内築山埴式	3A	DC5			溝積炭状文、波状文
067	弥生土器	甕	室内築山埴式	5B	DC6			炭付香
068	弥生土器	甕	室内築山埴式	3A	山内		12.9 *	溝積炭状文
070	弥生土器	甕	室内築山埴式	5A	DC6B		25.7 *	紀伊系、器底コナナメクスズリ、炭付 器底614と同一個体
072	弥生土器	甕(大型)	室内築山埴式	5B	DC6		36.8 *	大形系、口縁端部上下に器底内面タテハケ、内面コハク
076	弥生土器	甕	-	4A	山内		9.4 *	
080	弥生土器	甕	室内築山埴式	5B	山内		23.9 *	
081	弥生土器	甕	室内築山埴式	5B	山内			
082	弥生土器	甕	室内築山埴式	5B	山内		3.2 *	シクモン石含む
083	弥生土器	灰口甕	室内築山埴式	5B	山内		29.2 *	底面穿孔
090	弥生土器	甕	室内築山埴式	5C	山内		6 *	有段口縁、41と同一個体
099	弥生土器	鉢	室内築山埴式	3C	山内			把手付
102	弥生土器	甕	室内築山埴式	5C	DC6			大形系、外面タテハケ
112	弥生土器	甕	-	1B	DC4C(M)			口縁端部にコナメクスズリとナメクスズリ 両方とナメクスズリ、ナメクスズリ 両方とナメクスズリ
125	弥生土器	灰積甕	室内築山埴式	3C	DC5			溝積炭状文
126	弥生土器	把手	室内築山埴式	3C	DC5			水差しか?
127	弥生土器	甕	-	3C	DC5	10.7 *		
129	弥生土器	灰積甕	室内築山埴式	1B	DC4C(L)			溝積炭状文
132	弥生土器	ミニチュア甕	室内築山埴式	2A	EP8			
141	弥生土器	甕	室内築山埴式	3C	山内			有段口縁、69と同一個体
149	弥生土器	灰口甕	室内築山埴式	1B	DC4C(L)			溝積炭状文
152	弥生土器	鉢	室内築山埴式	2A	EP8			溝積炭状文
159	弥生土器	甕	室内築山埴式	3A	DC5			大形系、口縁端部をH外面タテハケ
161	弥生土器	灰積甕	室内築山埴式	2B	DC5F			
162	弥生土器	鉢	室内築山埴式	2C	EP10	10.7 *		把手付
163	弥生土器	灰積甕	室内築山埴式	6B	EP9			
164	弥生土器	甕	室内築山埴式	1B	EP6			
165	弥生土器	灰口甕	室内築山埴式	1B	EP6			溝積炭状文
167	弥生土器	鉢	室内築山埴式	1B	EP6			
170	弥生土器	甕	室内築山埴式	6C	DC7	10.3 *		炭付香
173	弥生土器	甕	室内築山埴式	2A	EP8			紀伊系、炭付香

表 5.1 出土土器一覧(2)

No.	系統	器種(形式)	土器製式(時期)	地区	層準・遺構	器高(cm)	口径(cm)	備考
174	弥生土器	甕	-	5A	199			採石場, ヨコエナメハケ
183	弥生土器	高杯	畿内第II式	2B	DC5P			
188	弥生土器	短胎甕	-	4B	10層(中央南北折戻りい トレンザ)			
191	弥生土器	扁胎甕	畿内第II式	2C	10層			磨折点線文
192	弥生土器	広口甕	畿内第II式	2B	DC5P		13.4*	
196	瓦葺	三足釜	中世	1C	DC3			
197	陶葺	甗	透炊	1C	DC3			
198	陶葺	甗	透炊	1C	DC3			
199	瓦葺	甗	13世紀後半~14世紀 前半	1C	DC3			和泉型
200	須恵器	高杯	6世紀	68C	104			
201	瓦葺	甗	13世紀後半~14世紀 前半	68C	104			和泉型
202	須恵器	杯身	凡三I型式I段(7世紀 後半)	5C	DC1			

器高の*印は残存高, L印の*印は推定値を示す。

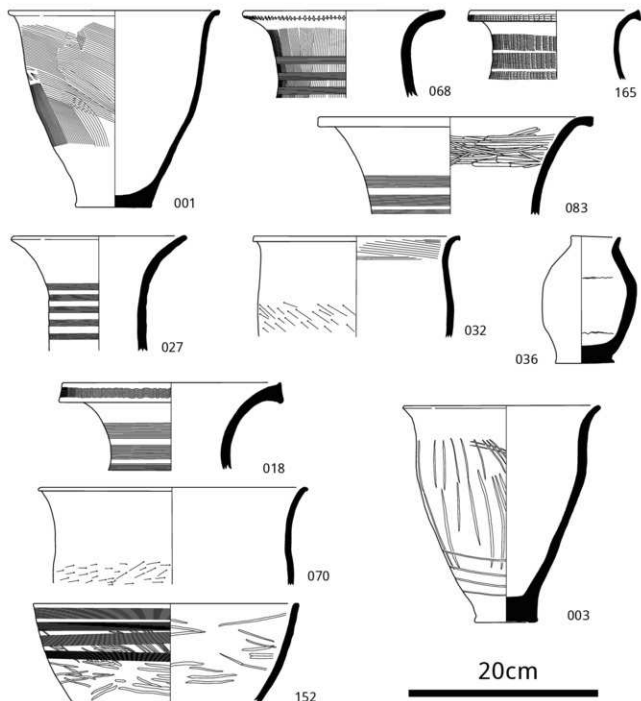


図 5.4 弥生土器実測図

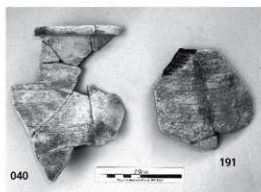


图 5.5 II層出土弥生土器



图 5.6 II層出土弥生土器

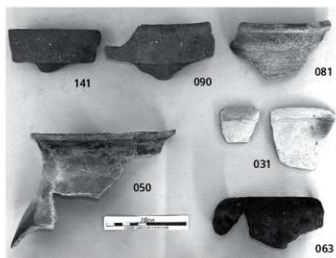


图 5.7 II層出土弥生土器



图 5.8 II層およびEP6出土弥生土器

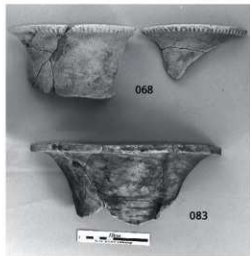


图 5.9 III層出土弥生土器

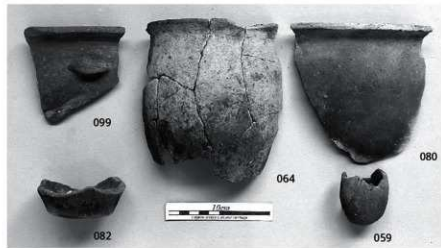


图 5.10 III層出土弥生土器

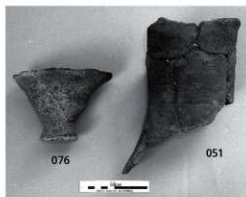


图 5.11 III層出土弥生土器



图 5.12 III層出土弥生土器

は頸部にやや押圧が加わった櫛描直線文がみられる。068の外反しながら立ち上がる口縁をもち、口縁端面下部には刻み目がみられる。037は底部のみが残存するが、底面には輪状の押圧痕がみられる。001,064,080は緩やかに外反する口縁をもち、064,080は胴部中央付近に最大直径がある。001,080の外面にはハケが施されている。082は底部のみが出土した。099は把手をもつ鉢で、把手はやや下方に垂れ下がっている。076はやや裾部がのび、頂部中央には窪みがある。風化が著しく調整は不明瞭。059は口縁がやや内側に湾曲する猪口型の手づくね土器。いずれの土器も畿内第II様式に属する。

DC4出土土器には長頸壺(027)、広口壺(149)、無頸壺(036,129)、壺(034,112)、甕(025,028,029,032,041)がみられる。027は外反しながら拡がる口縁をもち、頸部には櫛描直線文が施されている。149はおそらくは広口の口縁をもつと考えられ、頸部および胴部は丁寧にヘラミガキが施され、頸部と胴部境界には多条沈線がみられる。036はやや粗雑な成形のミニチュア壺で、表面にはヘラミガキが施されている。129はやや外反気味に立ち上がる口縁をもち、口縁端面には刻み目が、頸部には櫛描直線文がみられる。034は球形の胴部をもつ壺で頸から口縁部を欠損する。おそらくは長頸の広口壺と考えられる。風化が著しく調整は不明瞭。112は口縁部のみ出土した。端面はタテ方向とヨコ方向の櫛描直線が交互に組み合わせられた文様が施され、貼り付けの刻み目文様がみられる。032は紀伊系の甕で、頸部と胴部の境界に緩やかな段をもち、胴部はナナメ方向のケズリが施されている。口縁部内面にはハケがみられる。025,028,029,041はゆるやかに外反しながら拡がる口縁をもつ。表面の風化が著しく調整は不明瞭で、煤の付着が著しい。いずれの土器も畿内第II様式に属する。



図5.14 DC4出土弥生土器

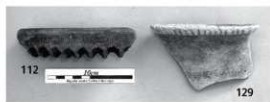


図5.16 DC4出土土器

図5.15 DC4およびIII層出土土器



図 5.17 DC4 出土弥生土器



図 5.18 DC4 出土弥生土器



図 5.19 DC4 出土弥生土器

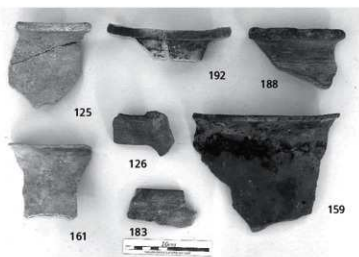


図 5.20 DC5 出土弥生土器



図 5.21 DC5 および DC6 出土弥生土器



図 5.22 DC5 出土弥生土器

DC5出土土器には広口壺(192)、短頸壺(125,161,188)、壺(015,066)、甕(013,159)、高杯(183)、把手(126)、蓋(127)がある。192は口縁は外反しながらロート状に広がる口縁をもつ。表面の風化が著しく調整は不明瞭。125,161,188は外反しながら短く立ち上がる口縁をもち、125の口縁短面には波状文、188には矢羽状の文様がみられる。161は無文で、188の胴部には櫛描直線文が施されている。015は胴部～底部のみ残存。表面の調整はミガキ。066はおそらくは長頸壺の胴部片と考えられ、櫛描直線文と波状文が施されている。013は口縁端部に刻み目をもち、口縁内面はヨコ方向のハゲ、胴部はタテ方向のハゲが施されている。159は口縁端部に刻み目をもち、胴部はタテ方向のハゲが施されている。いずれも大和型の甕。183は内湾形の高杯口縁部で、調整は不明瞭。126は鉢の把手と考えられ、表面には櫛描直線文がみられる。いずれの土器も畿内第II様式に属する。

DC6出土土器には広口壺(018,019)、甕(003,014,045,067,070,072,102)がある。018は受け口状の段をもち、口縁は上方に拡張する。頸部には櫛描直線文が施されている。019は外反しながらロート状に広がる口縁をもち、口縁短面はヨコナデが、頸部はミガキが施されている。003は最大径を胴部上半にもつ。067は僅かに外側へ折り曲げられた口縁をもつ。045は緩やかに外反しながら立ち上がる口縁をもち、端部は丸く収められている。外面にタテ方向のハゲ調整がみられ、大和型の甕と考えられる。072は口縁端面上下に刻み目をもち、口縁内面はヨコ方向のハゲ、外面はタテ方向のハゲが施されている。大型の大和型甕と考えられる。014および070は同一個体である。頸部と胴部の境界に緩やかな段をもち、胴部はナナメ方向のケズリが、口縁部内面には粗いハゲが施されている。紀伊系の甕。



図5.23 DC6出土弥生土器

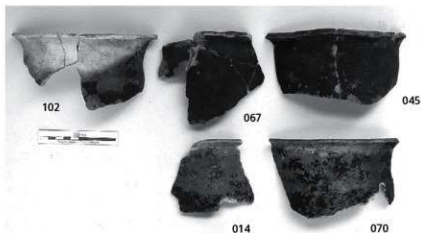


図5.24 DC6出土弥生土器



図5.25 DC6出土弥生土器



図5.26 DC6出土弥生土器

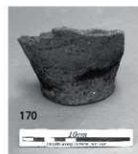


図5.27 DC7
出土弥生土器

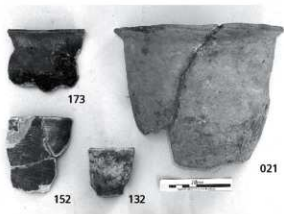


図5.28 EP8出土弥生土器

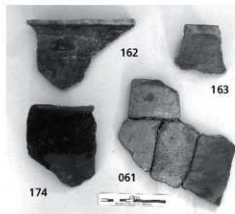
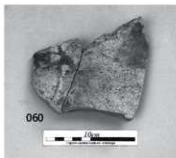


図5.29 EP9, 10およびIII層出土弥生土器

図5.30 MD1出土弥生土器



いずれの襷も表面の煤の付着が著しい。いずれの土器も畿内第II様式に属する。

DC7出土遺物には170の襷底部のみがみられた。畿内第II様式に属する。

EP8出土土器には襷(021,173)、鉢(152)、ミニチュア襷(132)がみられる。021は逆釣鐘形状をもち、表面には粗いハケが施されている。173は頸部と胴部の境界に緩やかな段をもつ紀伊系の襷。152は外面にミガキを施した後、口縁下位に4条の櫛描直線文が施されている。132は粗雑な成形で、表面の風化が著しく調整不明瞭。

EP9出土土器には口縁下位に櫛描直線文が施された短頸壺(163)のみがみられた。

EP10出土土器には外反しながら立ち上がる口縁をもつ把手付鉢(162)と外面にハケが施され、煤の付着が著しい襷(174)がみられる。

MD1出土土器には数条の櫛描直線文が施された壺(060)のみがみられた。

以上の出土土器のうち弥生時代中期初頭(畿内第II様式)に限れば紀伊系の襷や大和型襷の出現率が高く、周辺の調査地点での同時期の土器と同じような傾向にある。

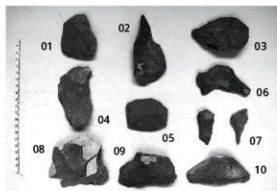


図5.31 III層出土打製石器

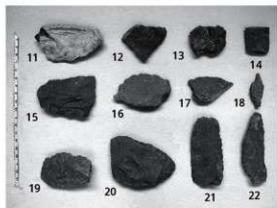


図5.32 III層出土打製石器



図5.33 EP6およびDC6出土打製石器

石器

・打製石器

打製石器はIII層(01~22)、EP6(23)、DC6(24,27,28)、DC4(25~38)、DC5(39~46)から出土した。供伴した土器型式から判断して23は弥生時代中期中葉(畿内第III様式期)に、それ以外のは弥生時代中期初頭(畿内第II様式期)に併行する。岩石種は13は褐色のチャート、他は二上山産サヌカイトである。以下の石器タイプおよびサブタイプは松田(1996)に従った。

III層出土打製石器には槍形もしくは剣形両面調整尖頭器(14)、刃部両面調整直刃削器(20)、刃部両面調整凸刃削器(16)、刃部片面

調整不完全両面調整直刃削器(15)、刃部両面調整複刃削器(01,21,22) えぐりのある刃部両面調整複刃削器(06) 不完全片面調整複刃削器(05) 刃部両面調整複刃尖頭削器(03) 石錐(07) 剥片(02,04) 細部調整剥片(12,17) 石核A(08,09) 石核B(10,13,19) 原礫(11)がある(図5.31,32)。これらのうち01,10,15の刃部にはこすれや打撃にともなう潰れが、03の基部には敲打痕がみられる。

DC6出土打製石器には剥片(26,28)と石核A(24,27)がみられた(図5.33)。

EP6出土打製石器には石核B(23)のみがみられた(図5.33)。

DC4出土打製石器には槍形両面調整尖頭器(37,38) 小型槍形両面調整尖頭器(34) 打製石鏃(30) 石錐(31) 剥片(33,35) 石核A(36) 石核B(32)がある(図5.34)。35の縁辺には敲打痕が集中する。34,37は表面が研磨されている。

DC5出土打製石器には槍形両面調整尖頭器(46) 小型槍形両面調整尖頭器(45) 刃部片面調整不完全両面調整直刃削器(44) 剥片(42,43) 石核A(40) 石核B(41)がある(図5.35)。

・磨製石器

磨製石器はIII層(04,06,07,09,10) DC4(01) DC5(03,05) DC6(02)から出土し、08と11は出土地点がわからない。いずれも弥生時代中期初頭(畿内第II様式期)に併行する。01~08,10は石包丁、11は小型の偏平片刃石斧であり、09は石包丁を作成するための素材と考えられる。01~10は三波川帯で産出する緑色~淡緑色の結晶片岩で、紀ノ川沿岸域で採取されたものと考えられる。11は泥岩。

・礫器

いずれも器種や用途については明らかではない。円磨の度合いから判断し、01~03,05,08~10は花崗岩もしくははんれい岩の、11は二上山産サヌカイトの河床礫と考えられる。04,06,07は砂岩製で06と07には焼成痕がみられる。

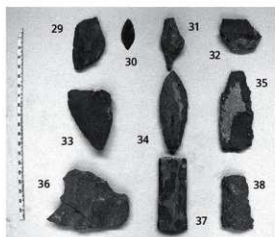


図 5.34 DC4 出土打製石器

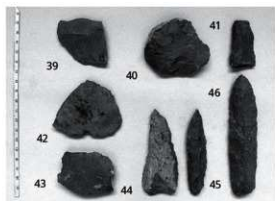


図 5.35 DC5 出土打製石器

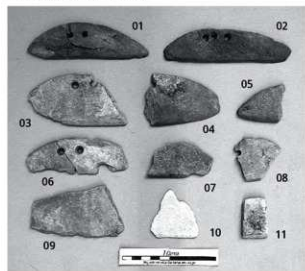


図 5.36 磨製石器



図 5.37 礫器

木製品

弥生時代中期初頭第1面、同2面で直立状態で検出した杭や柱、あるいはそれぞれの面にもなう遺構群から出土した加工木がみられた。このうち現地で確認できた直立状態で検出した杭や柱は120点以上あった(表5.2)。

柱(001~007, 020, 183, 194, 197, 198, 200)はMD1上面およびMD1に伴う柱穴とその周辺に分布する柱穴から出土したもので、先述の高床建物の柱と理解される。EP13で出土した183の柱と145の根絡み材は現地で組合わされた状態で確認できた(図4.00)。また、053の礎板と004の柱は同じ柱穴内から出土しており、この組み合わせも建物の沈下を防ぐためのものと考えられる。

杭や柱以外の木製品の出土は顕著ではなく、わずかに鎌(051)、刺突具(022)、容器(106)などがみられたのみである。

文 献

松田順一郎 1996 IV-1. 打製石器。「宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書」第2分冊, 東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会, 57-121。



図5.38 根絡み柱(183)



図5.40 根絡み材(145)



図5.41 柱(004)



図5.42 礎板(053)



図5.39 根絡み柱基部(183)

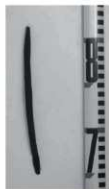


図5.43 刺突具(022)



図5.44 鎌(051)



图 5.45 柱 (001)



图 5.46 柱 (002)



图 5.47 柱 (003)



图 5.50 柱 (007)



图 5.48 柱 (005)



图 5.49 柱 (006)



图 5.51 柱 (020)

表 5.2 出土木製品一覽(1)

No. 器種	埋存時期	地区	層序・遺構・検出面	幅(cm)	長さ(cm)	直径(cm)	備考
001 柱	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	MD1上面		79.5	20.5	K22
002 柱	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4A	MD1上面		88.3	22.1	K21
003 柱	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4C	MD1上面		62.9	16.9	K109
004 柱	弥生時代畿内第Ⅱ様式	3B	MD1上面		57.5	16.6	K146
005 柱	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	MD1上面		66.3	17	K132
006 柱	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4A	MD1上面		48.1	17.7	K15
007 柱	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	MD1上面		52.5	17.8	K139
008 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式	2A	弥生時代中期初葉第2層		29.3	8.3	K2
009 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	弥生時代中期初葉第2層		39.2	8.2	K34
010 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	弥生時代中期初葉第2層		42.2	7.8	K39
011 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1C	弥生時代中期初葉第2層		31.2	7	K58
012 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式	2B	弥生時代中期初葉第2層		34.1	11.9	K70
013 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4C	弥生時代中期初葉第2層		25.3	7.8	K102
014 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	DP13		46.4	13.3	
015 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1B	弥生時代中期初葉第2層		19.4	3.7	K48
015 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1B	弥生時代中期初葉第2層		18.8	2.5	K43
016 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式	3B	弥生時代中期初葉第2層		11.2	4.8	K119
017 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	弥生時代中期初葉第2層		15.2	3.8	K144
018 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC		115.7	8	
019 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4A	弥生時代中期初葉第2層		42	4.7	K15
019 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4A	弥生時代中期初葉第2層		41.5	6.7	K15
019 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4A	弥生時代中期初葉第2層		25	5.1	K15
020 柱	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	DP11		22.8	16.2	
021 部材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC4U		6.1	2.1	
022 削器具(棒)	弥生時代畿内第Ⅱ様式		中央市北新田		16.2	0.7	
023 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC4L		8.7	4.6	
024 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式	2A			6.3	6.4	
025 材	弥生時代畿内第Ⅱ様式				11.6	5.1	
026 材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC4M		46.1	2.3	燃痕
027 材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC4L		58.2	4.6	
028 部材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC5		35.8	3	
029 材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC5		59.7	10.2	
029 材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC5		61.7	10.6	
030 材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	DC4A		61.9	6.7	
031 材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	DC4A		45.8	6.4	
032 材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	DC4A		34.7	4.2	
033 材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	DC4A		7.6	3.1	
034 材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	DC4A		46.5	6	
035 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1B	DC4C		46	6.2	
036 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式		EP19		36.4	5.6	
037 材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC4C		11.4	5.2	燃痕
039 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式		II層		24.3	7.4	
040 笥	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6		34.5	1.7	
041 板状加工木	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DU4L	4.6	25.7	1.4	
042 棒状加工木	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DU4U	1.5	21.9	1	
043 加工木	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DU4C	3.8	6.8	2.3	
044 材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		MD1	6	14.7	2.8	
045 加工木	弥生時代畿内第Ⅱ様式		MD1	9.2	26.7	6.4	
046 材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC4U M	4.5	39.9	3.3	
047 材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		II層		16.2	10.7	
048 材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4A	DC6A	11.2	52.2	12	
049 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式		II層		15.1	9.5	
050 材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	6A	EP9		25	7.4	
051 敷	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC5	16.3	29.2	3.7	
052 枕	弥生時代畿内第Ⅱ様式	5C	DC8		16.7	5.2	
053 板板	弥生時代畿内第Ⅱ様式	3B		11.2	22.7	1.5	K146と同じ穴内
054 材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		MD1	8.3	28.2	3.7	
055 加工木	弥生時代畿内第Ⅱ様式		MD1	7.9	17.5	3.7	

表 5.2 出土木製品一覽(2)

No.	器種	併行時期	地区	層・遺構・塚・出處	幅(cm)	長さ(cm)	直径(cm)	備考
056		弥生時代畿内第Ⅱ様式	2A	EP8		21.1	6.7	
057	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC5		18	5.7	
058	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC5		24.7	9.6	
059	加工木(板)	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP13	8	20.3	1.9	
060	加工木	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP13	9	23.3	4.2	
061	加工木	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP13	4.9	13.1	3.1	
062	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6		21	6.4	
063	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6	8.3	10.1	3.9	
064	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC5	9.4	23.6	6.2	
065	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6D	4.6	62.2	3.5	横板状
066	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP15	5.4	24.5	3.9	
067	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP15	4	23.9	3.2	
068	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP15	6.8	42.3	4.4	
069	杖?	弥生時代畿内第Ⅱ様式	3B	EP14	7.1	14.3	6.2	
070	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC4(西壁)	10.9	16.2	3.9	面取り
071	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6	8.1	50.9	5.7	
072	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	DC4		72.8	12.4	
073	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		中央市北新田		30.3	8.4	
074	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		中央市北新田		21	6.3	
075	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		中央市北新田		43.6	9.1	
076	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC4L	4	13.7	2.6	
077	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC4L	3.8	20.3	1.7	
078	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC4L	3.7	40.7	3.1	
079	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC4L	4.1	31.7	2.8	先端部欠損
080	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC8	2.5	21.1	2.1	
081	榫状加工木	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6F	6.6	29.8	3.8	
082	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6F	6.2	19.9	4.2	
083	板状加工木	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6F	4.9	39	3	
084	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6F	2.1	13.8	1.3	
085	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6F	5.4	13.1	2.6	
086	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6F	4.2	28.5	0.7	
087	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP16	10.3	22.8	7.1	切り口あり
088	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP16	5.6	55.6	4.6	
089	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP16	5.2	28.7	3.7	
090	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP16	5.1	26.2	2.6	
091	半截さ丸木柱	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP16	16.8	24.7	7	
092	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4C	EP17	9.4	11.3	6.3	
093	劈状	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC4(西壁)	10	77.5	0.5	
094	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4C	EP17	11.5	27.7	1.2	
095	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC5	3.1	14.3	1.2	
096	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC5	3.2	10.1	3	
097	板材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC5	4.6	19.4	0.7	
098	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	DC4	2.4	9.5	2.2	
099	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	DC4	4.2	10.6	3	
100	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	DC4	1.8	12.7	1.1	横板
101	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	DC4	3	9.4	1.1	
102	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	DC4	1.8	7.9	1.1	
103	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	DC4	2.9	7.9	3.1	横板
104	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		MD1	8.5	24.1	7.4	
105	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		中央市北新田	10	17.7	3.3	
106	容器	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6		9.7	4.5	
107	加工木	弥生時代畿内第Ⅱ様式		EP18	4.2	20.3	4.1	
108	榫状加工木	弥生時代畿内第Ⅱ様式		EP18	3	24.3	4.1	
109	加工木	弥生時代畿内第Ⅱ様式		EP18	10.9	34.9	8.3	
110	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		EP18	5.5	16.9	4.3	
111	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		EP18	5.9	12.5	4.5	
112	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		EP18	5.5	33.4	4.9	
113	杖	弥生時代畿内第Ⅱ様式		EP18	5.7	35.7	3.1	

表 5.2 出土木製品一覽(3)

No.	器種	埋付時期	地区	層準・造構・検出面	幅(cm)	長さ(cm)	直径(cm)	備考	
114	柱	弥生時代畿内第Ⅲ段式		FP18	5.3	45.8	4.7		
115	柱	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4B FP13	5.6	47.8	3.8		
116	柱	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4D FP13	8	26.3	4.8		
117	加工木	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4B FP13	7	19.5	2.7		
118	柱	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4B FP13	6.7	22.5	5		
119	柱	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4B FP13	7	20.5	3.9		
120	柱	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4B FP13	6.4	22.6	4.3		
121	柱	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4C P19	6.3	19.2	3.2		
122	柱	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4C P19	3.3	8.9	2.6		
123	板材	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4C P19	3.6	19.1	1.7		
124	板材	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4C P19	4.3	17.1	1.5		
125	板材	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4C P19	3.4	31.5	1.4		
126	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		弥生時代中期初葉第 2 面		27.2	11	K148	
127	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		1B 弥生時代中期初葉第 2 面	6	20.3	5.2	K51	
128	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		1C 弥生時代中期初葉第 2 面	7.1	23	5.6	K57	
129	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		2A 弥生時代中期初葉第 2 面	4.5	13.5	3	K36	
130	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		2A 弥生時代中期初葉第 2 面	3.4	12.2	2.2	K30	
131	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		弥生時代中期初葉第 2 面	3.5	9.6	3.2	K117	
132	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4B M1) 上面	8.5	21	7.5	K132	
133	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4B 弥生時代中期初葉第 2 面	9.9	30.9	3.5	K136	
134	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4A 弥生時代中期初葉第 2 面	9.5	18	9	K141	
135	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		弥生時代中期初葉第 2 面	8.1	16.6	6.9	K105	
136	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4A 弥生時代中期初葉第 2 面	7.2	21.8	5.6	K11	
137	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4C 弥生時代中期初葉第 2 面	6.1	23.1	5.1	K104	
138	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		1B 弥生時代中期初葉第 2 面	10.1	35.3	7.5	K44	
139	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		1C 弥生時代中期初葉第 2 面	6.1	12.6	3.3	K61	
140	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4C 弥生時代中期初葉第 2 面	4.6	41.6	3.5	K106	
141	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		2A 弥生時代中期初葉第 2 面	5.7	14.7	5.6	K31	
142	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		3B 弥生時代中期初葉第 2 面	4.7	38.8	1.6	K128	
143	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		1C 弥生時代中期初葉第 2 面	5.7	11.6	4.8	K54	
144	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		3B 弥生時代中期初葉第 2 面	3.1	10.4	2.5	K120/124	
145	礎石	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4B FP13	5.9	15.5	6		
146	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		弥生時代中期初葉第 2 面	6.5	15	6.1	K133	
147	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		1A 弥生時代中期初葉第 2 面	5.5	19.5	2	K27	
148	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4A 弥生時代中期初葉第 2 面	9.2	19.1	7.4	K142	
149	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		2C 弥生時代中期初葉第 2 面	6.5	29.6	5.1	K66	
150	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4C 弥生時代中期初葉第 2 面	8.3	28	5.9	K99	
151	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		3B 弥生時代中期初葉第 2 面	11.6	18.7	7.8	K127	
152	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		5A 弥生時代中期初葉第 2 面	30.2	8.3	K27		
153	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		2A 弥生時代中期初葉第 2 面	25.6	8.8	K29	横板	
154	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		5B 弥生時代中期初葉第 2 面	24.3	6.2	K115		
155	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		1A 弥生時代中期初葉第 2 面	18.1	6.8	K41		
156	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		1A 弥生時代中期初葉第 2 面	28.1	8	K25		
157	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		1C 弥生時代中期初葉第 2 面	43.8	9.4	K59		
158	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		2C 弥生時代中期初葉第 2 面	7.8	20.8	4.9	K65	
159	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		1C 弥生時代中期初葉第 2 面	36.7	8.3	K63		
160	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		1B 弥生時代中期初葉第 2 面	7.9	34.5	7.9	K47	
161	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式				11.9	5		
162	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4A 弥生時代中期初葉第 2 面		8.9	4.8	K23	
163	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		2B 弥生時代中期初葉第 2 面	3.5	13.7	2.4	K1	
164	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		1A 弥生時代中期初葉第 2 面	4.9	19	2.5	K40	
165	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		1A 弥生時代中期初葉第 2 面	5.3	8.9	4.6	K40	
166	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		3C 弥生時代中期初葉第 2 面	1.8	13	2.8	K109/112	
167	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		5C 弥生時代中期初葉第 2 面	3.2	14.7	2.8	K109/112	
168	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		2A 弥生時代中期初葉第 2 面	3.4	14.7	3	K32	
169	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		6A 弥生時代中期初葉第 2 面		11.9	5	K28	
170	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		4C 弥生時代中期初葉第 2 面		19.1	9.2	K103	
171	枕	弥生時代畿内第Ⅲ段式		1B 弥生時代中期初葉第 2 面		23	10	K53	

表 5.2 出土木製品一覧(4)

No.	器種	発行時期	地区	器準・遺構・検出面	幅(cm)	長さ(cm)	直径(cm)	備考	
172	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	2B	弥生時代中期初葉第2面		30.2	9.2	K69	
173	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	4C	弥生時代中期初葉第2面		40.3	7.7	K98	
174	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	1B	弥生時代中期初葉第2面		40.4	7.7	K49	
175	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	1B	弥生時代中期初葉第2面		33.2	8.3	K46	
176	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	1B	弥生時代中期初葉第2面		34.6	6.5	K48	
177	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	5B	弥生時代中期初葉第2面		37.3	8.8	K26	
178	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	1B	弥生時代中期初葉第2面		28.8	9.2	K50	
179	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	4A	弥生時代中期初葉第2面		41.7	8.2	K19	
180	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	3A	弥生時代中期初葉第2面		39.1	8.7	K11	
181	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	5A	弥生時代中期初葉第2面		33.1	11	K25	
182	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	2C	弥生時代中期初葉第2面		33.4	10.3	K88	
183	楕円柱	弥生時代内第Ⅲ段式	4B	IP13		34.5	17.8	K145	
184	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	1B	弥生時代中期初葉第2面		49.6	9.4	K52	
185	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	1C	弥生時代中期初葉第2面		24.5	8	K64	
186	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	1B	弥生時代中期初葉第2面		34	6.8	K45	
187	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	1B	弥生時代中期初葉第2面		25	6.3	K45	
188	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	3B	弥生時代中期初葉第2面		31.5	11.5	K126	
189	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	3B	弥生時代中期初葉第2面		37.5	11.1	K95	
190	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	1B	弥生時代中期初葉第2面	13.6	43.1	8.2	K42	
191	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	4B	弥生時代中期初葉第2面	7.4	45.1	11.9	K140	
192	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	5B	弥生時代中期初葉第2面		53.5	8.4	K113	
193	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	4A	弥生時代中期初葉第2面		44.1	13	K14	
194	How柱	弥生時代内第Ⅲ段式	4A	弥生時代中期初葉第2面		41.7	14.6	K17	
195	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	4B	弥生時代中期初葉第2面		37.7	9.4	K134	
196	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	4B	弥生時代中期初葉第2面		67.4	13.3	K131	
197	How柱	弥生時代内第Ⅲ段式	4B	弥生時代中期初葉第2面		37.2	13.3	K120	
198	How柱	弥生時代内第Ⅲ段式	4C	弥生時代中期初葉第2面		51.1	15.1	K101	
199	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	3B	弥生時代中期初葉第2面		47.3	12.3	K147	
200	How柱	弥生時代内第Ⅲ段式	3A	弥生時代中期初葉第2面		45.5	17.9	K12	
201	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	3A	弥生時代中期初葉第2面		61.5	9.8	K12	
202	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	2A	弥生時代中期初葉第2面	7.3	12.8	4.9	K9	
203	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	2A	弥生時代中期初葉第2面		5.7	14.3	3.8	K9
204	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	3A	弥生時代中期初葉第2面	10.3	15.3	4.8	K13	
205	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	1A	弥生時代中期初葉第2面		4.1	13.5	2.7	K26
206	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	1A	弥生時代中期初葉第2面		4.8	14.8	4.2	K36
207	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	1A	弥生時代中期初葉第2面		4.7	11.3	4.6	K33
208	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	2A	弥生時代中期初葉第2面		7	16	5.3	K6
209	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	1C	弥生時代中期初葉第2面		4.7	20.2	4.2	K62
210	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	1C	弥生時代中期初葉第2面		17.3	5.2	K55	
211	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	1C	弥生時代中期初葉第2面		11.5	3.3	K55	
212	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	5B	弥生時代中期初葉第2面		16.1	4.3	K114	
213	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	5B	弥生時代中期初葉第2面		12.8	5	K114	
214	杖	弥生時代内第Ⅲ段式		弥生時代中期初葉第2面		11.3	6.7	K20	
215	杖	弥生時代内第Ⅲ段式		弥生時代中期初葉第2面		3	12	4.2	K20
216	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	2A	弥生時代中期初葉第2面		3.8	51.4	2.7	K4、曲取りあり
217	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	5A	弥生時代中期初葉第2面		6.8	14.8	3.1	K24
218	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	5A	弥生時代中期初葉第2面		6.7	14	4.8	K24
219	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	4B	弥生時代中期初葉第2面		5.1	19.5	6.8	K139
220	杖	弥生時代内第Ⅲ段式		弥生時代中期初葉第2面		9.5	18.8	6.3	K143
221	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	1C	弥生時代中期初葉第2面		29.1	4.7	K60	
222	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	1A	弥生時代中期初葉第2面		4.8	16.6	3.3	K28
223	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	2A	弥生時代中期初葉第2面		18.6	5.3	K5	
224	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	2A	弥生時代中期初葉第2面		4	13.1	4.3	K5
225	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	4B	弥生時代中期初葉第2面		7.7	23.2	3.7	K138
226	杖	弥生時代内第Ⅲ段式	4B	弥生時代中期初葉第2面		5.7	21	3.5	K138

備考欄の先頭に付した番号は括弧もしくは柱の取り上げ番号、脚上記載は図4.5の分布図参照。

第6章 まとめと課題

- ・宮ノ下遺跡第11次調査では標高0.3～-0.15m付近を中心に発掘調査を実施し、多数の弥生時代中期初頭(畿内第II様式)の遺物、わずかに同時代中期中葉(畿内第III様式) 6世紀、7世紀後半、13世紀後半～14世紀前半、近世の遺物が出土した。また、弥生時代中期初頭に併行する遺構面を2面(弥生時代中期初頭第1面, 同2面)確認した。
- ・標高0.3m付近のI, II層層界には地震動による変形構造の一種である火災構造がみられた。この変形構造はこれまでの周辺の調査でも確認できており、古墳時代中期～後期ごろの地震によるものと推定される。
- ・弥生時代中期初頭第1面に先行する同2面は、1面形成時の大規模な掘削により大部分が当時の機能面を失っていた。
- ・弥生時代中期初頭第1面では溝を掘削したときに産した残土によって盛土が施され、さらにその上面には高床建物が建っていたと推測される(MD1上面)。これは当時の地下水位の上昇にともなう湿気を回避するために作られた施設と考えられる。
- ・柱穴の堀形と柱の位置関係から判断して高床建物の柱は建物の荷重によって沈下していることがわかった。また、根絡み構造をもつ柱や柱穴の底に礎板がしかれているのがみられ、沈下を防ぐための工夫が施されていた。
- ・弥生時代中期初頭第2面では直立状態で埋没していた杭を無数に検出したが、用途についてはよくわからない。
- ・出土遺物のうち、畿内第II様式の土器のなかには紀伊系の襍が散見された。また、同時期に併行する木製品は杭や柱が大多数を占め、道具類はまれである。
- ・本書では弥生時代中期初頭第1面の埋没過程については詳しく言及していないが、現地調査ではこれに関するデータを記録しているので後日あらためて論じたい。また、すべての出土木材の切片を採取しているため、周辺の植生を復原するための材料にしたい。

報告書抄録

ふりがな	きょうどうじゅうたくけんせつともなうみやのしたいせきだいじゅういちじはっくちょうさ ほうこくしょ
書名	共同住宅建設に伴う宮ノ下遺跡第11次発掘調査報告書
副書名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	別所秀高
編集機関	財団法人東大阪市文化財協会
発行機関	財団法人東大阪市文化財協会
発行年月日	2002.08.31
作成法人ID	42170
郵便番号	577-0843
電話番号	06-6736-0346
住所	東大阪市荒川 3-28-21
ふりがな	みやのしたいせき
遺跡名	宮ノ下遺跡
ふりがな	ひがしおおさかしちょうどういっちょうめななじゅうよんのいちほかじゅういちひつ
遺跡所在地	東大阪市長堂 1 丁目 74-1 他 11 筆
市町村コード	27227
遺跡番号	125
北緯	343957.1 (JGD2000/GRS84)
東経	13513346.4 (JGD2000/GRS84)
調査期間	1999.11.01-2000.01.17
調査面積	600
調査原因	共同住宅建設工事
種別	集落跡
主な時代	弥生
遺跡概要	弥生中期初頭 - 柱穴 + 溝 + 土壇 - 弥生土器 + 打製石器 + 磨製石器 + 木製品 / 弥生中期中葉 - 弥生 土器 / 古代 - 土器 / 中世 - 瓦器 / 近世 - 陶器
特記事項	弥生中期初頭の柱の中に建物の沈下を防ぐための根絡み構造をもつものが見られた。

共同住宅建設に伴う
宮ノ下遺跡第 11 次発掘調査概要報告書

発行年月日 2002 年 8 月 31 日
発 行 財団法人東大阪市文化財協会
〒 577-0843 東大阪市荒川 3 丁目 28-21
印 刷 株式会社 近畿印刷センター
〒 580-0001 柏原市本郷 5 丁目 6-25
